



白河の防災と復興を 高校生が伝える！ パンフレット

This booklet is about disaster management and restoration of Shirakawa city made by high school students.



裏庭
Uranawa

03 目次

目次、活動概要、メンバー紹介、白河市とは 01

旗宿

旗宿地域と災害 03

旗宿の仮置き場と地域の人たちの協力 05

旗宿仮置き場の管理とこれから 06

台風 19 号と旗宿と避難所と ー避難所の設置と実際ー 07

葉の木平

葉ノ木平震災復興公園について 09

あの日葉ノ木平で起こったこと 11

神戸イベントレポート

神戸訪問レポート～伝える大震災、つなげる防災～ 13

防災ライターを経験して 14

04 白河市とは



福島県中通り地方の南部に位置する街。人口は約 59,671 人、面積は 305.3 km² (2019 年現在)。東北の玄関口と呼ばれ、市内には「白河の関」や松平定信が治めた「小峰城」があります。市内には白河高校・白河旭高校・白河実業高校 3 つの高校があります。大学や短大はありません。白河ラーメンや和菓子が有名です。

葉ノ木平と旗宿の位置

旗宿は、「白河の関」跡のある地域。白河市の南部にあたり、栃木県と接しています。山林に囲まれ、里山が広がります。地域の特産物は蕎麦。関の森公園で行われる新そば祭りが一大イベント。

葉ノ木平は、小峰城から見て、阿武隈川の対岸にあたる地域。地域の東側を国道 294 号線が走り、西側には斜面があります。国道 294 号線は、国道 4 号線や東北自動車道と接続するために現在拡張工事中。



01 活動概要

白河市にあるコミュニティ・カフェ EMANON を拠点に活動する「裏庭編集部」。“高校生ライター”が、地域の情報を発信しています。2019-20 年のテーマは地域の防災。東日本大震災から白河市に生まれた防災・復興の取り組みを取材し、白河市内外に発信します！



！ 白河市と東日本大震災

2011 年 3 月 11 日に発生。日本観測史上最大のマグニチュード 9.0 の揺れが、東日本の沿岸地域を中心に未曾有の被害をもたらしました。白河市では、震度 6 強の揺れでによる土砂災害などで、葉ノ木平地区で 13 名、萱根地区で 1 名、大信隈戸地区で 1 名がなくなりました。双葉郡にある福島第一原子力発電所の事故由来の放射性物質による環境汚染、それに伴う風評被害の影響も受けました。

02 メンバー紹介



駒坂 すみれ

白河旭高校

最近、炊き立ての白米に夢中。



斎須 いぶき

白河旭高校

JRC 委員会で防災を勉強しています。今回は参加出来て良かったです。



坂田 実紀

白河旭高校

抹茶と音楽を聞くのが好きです！
竈門炭治郎の耳飾りになりたい。



柳沼 諒

白河旭高校

麻雀が好き。塩辛は生き甲斐。
頑張って生きています。



丸山 はるか

白河旭高校

私は踊るのが好きでよさこいをやっています。



星 颯斗

白河高校

アウトドア派のラブライバー。
バドミントン部。



松本 大河

白河高校

絵が下手な美術部員。
超甘党でポジティブ。

サポートスタッフ

- 鈴木 萌 (宇都宮大学)
- 佐藤 勇吹 (中央大学)
- 藤田 剛志 (白河市役所)
- 青砥 和希 (未来の準備室)

旗宿地域 と 災害

除染と仮置き場、
台風19号について

H A T A
J Y U K U



旗宿とは

旗宿は、白河の関跡のある地域。山林に囲まれ、里山が広がります。地域の特産物は蕎麦です。除去土壌を管理する「旗宿仮置き場」があります。このページでは、除染とは何か？から丁寧に説明します。

除染とは

「除染」とは、地表面や建物に付着した放射性物質を取り除き、空間線量を低減させる作業のこと。東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故によって放出された放射性物質は、東日本の広い範囲に拡散。地域によっては、事故以前と比べて高い空間放射線量が計測されました。

私たちが安心して暮らすために、国や県、市町村が、空間放射線量を低減させるため「除染」を行ってきました。2011年8月に公布された放射性物質汚染対処特措法に基づいて白河市は、汚染状況重点調査地域に指定されました。市は、除染実施計画を定めて除染を実施する区域を決定、除染を進めました。

白河市の除染の優先順位

(0) 線量低減化活動支援事業

事故発生直後は、国や市だけで除染を行うには限界があり、国が法律を制定させるための審議の時間も必要でした。子どもたちが関わっている場所の除染をいち早く始めるため、市民に補助金を交付。PTAやボランティアが校庭の表土を剥ぎ取る、通学路の洗浄をするなど線量

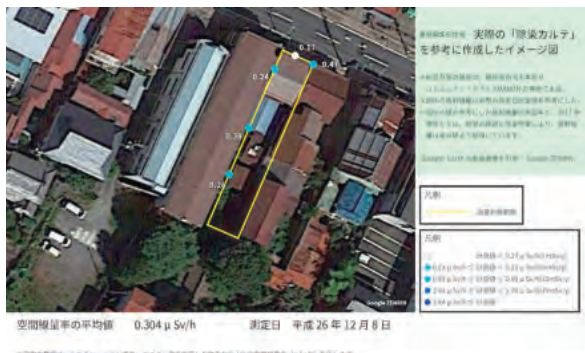
放射線物質による被ばく線量を下げるには大きく三つの手順があります。まず、①取り除く。放射性物質が付着した表土を削り、落ち葉や枝葉は除去し、建物は洗浄します。次に②遮る。放射性物質を土やコンクリートで覆い、放射線を遮ることで空間放射線量を減らします。最後に③遠ざける。放射性物質を遠ざけることで放射線の強さは弱まり、人への被ばく線量を下げます。この「取り除く」作業を、白河市では震災後から2016年末までに、14万720戸の家屋で実施。さらに2017年からは企業や工場の敷地でも実施しています。白河市での除染は、委託した除染事業者のマニュアル違反の事例等もなく、計画通りに進みました。

実際の除染作業

放射線物質による被ばく線量を下げるには大きく三つの手順があります。まず、①取り除く。

放射性物質が付着した表土を削り、落ち葉や枝葉は除去し、建物は洗浄します。次に②遮る。放射性物質を土やコンクリートで覆い、放射線を遮ることで空間放射線量を減らします。最後に③遠ざける。放射性物質を遠ざけることで放射線の強さは弱まり、人への被ばく線量を下げます。この「取り除く」作業を、白河市では震災後から2016年末までに、14万720戸の家屋で実施。さらに2017年からは企業や工場の敷地でも実施しています。白河市での除染は、委託した除染事業者のマニュアル違反の事例等もなく、計画通りに進みました。

個人の住宅を対象とした宅地除染ではまず、空間放射線量を測定します。汚染状況重点調査地域の指定の基準となる毎時0.23μSv/hの数値が検出された場合、まず家主の方から除染実施の同意を得ます。それから、除染を行う世帯それぞれに個人カルテを作成。宅地の航空写真と区画、測定地点の空間放射線量



「除染カルテ」イメージ図

取材・編集 / 鈴木 萌

取材当時白河高校生。現在は宇都宮大学生。

実際にお話を聞きました

鈴木 萌



宅地除染の作業で、一番大変だったことはなんですか？

除染作業に従事された方



除染作業の一つに木の枝や葉を落とす作業があって、枝や葉を落とさなくていい部分を落として！ とお願いされたりする頼みごとが多くて、受け答えに納得してくれない方もいて、大変でした。私たちは植木職人ではないのですが…(苦笑) 逆に落とさなくてはいけない部分を落とさないで！ とお願いされたり、やはり皆さんご自身のお家やお庭に関わることでですから、頼みごとが多く、受け答えをするのに大変でした。あとはマスクですかね…除染作業では、どんなときも常にマスクをしなければなりません。さらに手袋もしなくてはならない、長そでも、まくってはいけない。雨天時はカッパを着る。など、他の土木工事に以上に細かい安全管理のための決まりがあったので、特に夏の作業は暑くて大変でしたね。

を下げるための除染を支援しました。

(1) 放射性物質汚染対処特措法

市のモニタリング調査の結果から空間線量の高い地区を優先実施。大信地区↓旧白河地区↓表郷地区↓東地区の順に実施。

(2) 放射性物質汚染対処特措法

その中でも、市民の生活空間を優先し、さらに子供や妊婦の生活空間である学校や公園などの教育施設を優先して実施しました。

除染の目的

そのひとつに「市民に係る追加被ばく量を年間1ミリシーベルト(1mSv/year)以下にすることを目標にします」というものがあります。日本人の1年間の平均被ばく線量は2.1ミリシーベルトです。

この数値は特措法に基づく基本方針により規定されており、国際放射線防護委員会の定める「公衆の追加被ばく線量限度として年間1ミリシーベルトの考え方」に沿っています。また、この数値を超えたからといって、これ以上被ばくしたらすぐに身体に影響があるというわけではありません。1ミリシーベルトという数値は、放射線防護措置を効果的に進めるための目安で、「これ以上被ばくすると健康被害が生じ



皆さんは福島であつたような原発事故が近くで起きてしまった時、住んでいる地区に「除去土壌の仮置き場を作らせて下さい。」と言われていたら、仮置き場のために「協力」することはできますか？ 私は、そう簡単に協力したいという考えは出てこないと思います。私だけでなく、そう考える人も多いのではないのでしょうか。白河市旗宿の仮置き場がどのような場所か、どのような人々の協力によって出来たかを伝えたいと思います。

旗宿仮置き場の管理とこれから

福島県白河市。白河市は福島第一原子力発電所から約80キロメートルの所にある。ラーメンの有名な町だ。今回、私はその白河市旗宿の仮置き場に行った。仮置き場では、汚染土の管理方法、仮置き場のこれからを教えて頂いた。ぜひ皆様にも知って頂きたく、この記事を書いた。仮置き場というのは、汚染土を一時的に保管しておく所だ。旗宿仮置き場の場合、広さ約11ヘクタール。汚染土壌は2017年時点で18万7千袋あつた。集められた汚染土は中間貯蔵施設に運ばれ、最後に最終処分場で処理される。現在も少しずつだが運び出しの作業が行われている。1日にダンプカー20台分、約150袋。1ヶ月で約3千袋運び出されている。

現在仮置き場にある汚染土は、フレキシブルコンテナ（フレコン）や、大型土嚢などに入れられ、水を通さない遮蔽シートなどを下に敷き、上を遮水シートなどで覆い管理されている。この保管方法の放射線に対する遮蔽効果は99.8%だ。なので、仮置き場の放射線量はかなり低い。取材の時に目の前で測って頂いた。旗宿仮置き場の数値が、0.06マイクロシーベルト（ $\mu\text{Sv/h}$ ）。除染対象となるのが、

旗宿の仮置き場と地域の人たちの協力

仮置き場には、フレキシブルコンテナ（略称：フレコン）と呼ばれる袋があります。フレコンには、家庭や工場の除染作業で発生した土や木の枝、草が約1トン詰まっています。白河市旗宿地区仮置き場には、国会議事堂より広い敷地に、フレコンが15万袋並べられています。住んでいる近くに、除染で発生したゴミの詰まったフレコンがあつたら、体に悪い影響が出るのではないかと考える人もいるかもしれません。しかし、旗宿地区では違いました。仮置き場を設置する際、市の職員の方の説明もあつて、住民全員が設置に同意しました。そして地域の方からは、（白河市全体の）除染を子供たちのためには早く進めて欲しいという声があがつたそうです。

震災から9年が経とうとしている現在でも、地域の方々の安心感を補うために旗宿の住民自ら組織した「旗宿監視委員会」が活躍しています。担当者が週に1回、全17ヶ所の計測点で放射線量を測定しています。17ヶ所には、目印として高さ1mの黒い杭が打つてあります。仮置き場の線量の測定には、放射線測定器を用いています。計測した線量は、白河市のホーム

ページや、旗宿行政センターの掲示板で公表されています。いつでも、誰でも見る事が出来ます。線量の測定以外にも、旗宿地域の人たちは、仮置き場敷地内の草刈りをしたり、ゴミ拾いをしたりして、仮置き場の管理に協力しています。

白河市では、地域の方の理解によってできた仮置き場が、地域の人の手によって支えられているのです。例えば郡山市では、市内に仮置き場をつくる地域を決めることができず、各家庭の庭の地中にフレコンが埋まっていると聞きまして、それを聞いたことで、より地域で協力して支えていることをすごいなと思いました。

私は今回の取材を行い、人と人との間には「協力」が必要不可欠だと感じました。例えば、旗宿監視委員会の方々には放射線量を測定するだけでなく、地域の人たちに実際に見てもらうこと。そのような機会があれば、安全性を伝え、安心して生活することに繋がります。また、自分の暮らしに関する大切なことなので、自分から積極的に協力することが出来ると思います。

取材・ライター／ 丸山 はるか

今回の記事で、汚染土の扱われ方、白河市の現状が伝われば嬉しい。仮置き場は跡地利用され、物資は再利用される。少しずつだが、町が良い方向へ向かっている。いつか、白河市が、福島県が、震災以前より賑わう日も遠くないのかもしれない。取材を通して肌で感じた。

取材・ライター／ 柳沼 諒



台風19号と旗宿と避難所とー避難所の設置と実際ー

あなたは、災害が起きた場合、避難所に行こうと考えていますか？ 2019年10月12日、台風19号が日本に上陸し、福島県では31人が亡くなり、土砂災害は78件、1万4197棟の住宅被害がありました。白河市内でも2人が命を落しました。このような災害が起きた場合に私たちが頼ることのできる場所が避難所です。しかし、実際に避難所を利用したことがある人は少ないのではないのでしょうか。実は避難所には自分の命を守る以外のメリットがあります。

白河市旗宿では、地区の中を流れる阿武隈川支流の杜川（やしろがわ）が氾濫しました。山に囲まれた地形のため、地区内では土砂崩れも発生しました。地区と白河市街地を結ぶ道路が氾濫によって陥没し、土砂が流入。集落が孤立状態になってしまいう危険性がありました。私は都会よりも田舎の方が他の場所へ行く抜け道が多いと考えていたので、その事実を聞いて驚きました。

白河市は、10月12日15時ごろ、旗宿地区の避難所設置のため職員を派遣。当時、避難所設置の担当になった白河市教育委員会事務局の藤田剛志さんにお話を伺いました。

避難所では常に災害情報がやりとりされている



避難所へ行くメリットまとめ

- 1 自分の身を守ることができる**
多くの避難所は、安全な場所に立地しています。
- 2 正確な情報を入手できる**
避難所には県内市内の情報が集まるのでスマートフォンが使えなくなった場合や、停電の時にも情報を入手できる。市役所からの情報なのでネットよりも情報が正確。
- 3 行政が、住民の安否などの情報を把握できる**
住民が避難所にいることで避難指示をする立場の人が地域の情報を把握できる。
- 4 地域の人同士で支えあえる**
個人でいるよりも地域で集まった方が安心感が得られる。



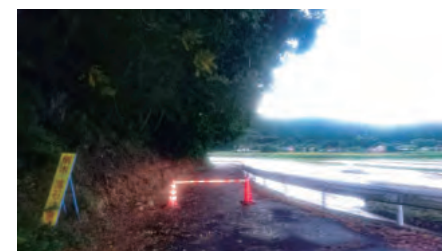
旗宿地域では、毎年新そばまつりを行なっています。お祭りでたくさんのおそばを提供していることも、避難所の運営に役立っているのかも。

新そばまつりでは、打ちたてのそばに舌鼓を打てます。



避難所は県内市内の災害情報などの情報が集まる場でもあります。さらに、住民が1人でも避難所にくれると近所に情報発信がしやすくなり、避難所の係の方々も状況把握がしやすくなります。つまり、避難所には自分1人の身を守る以上の効果があり、あなたが避難することによって他の住民を助けることができる可能性があるのです。

杜川氾濫による通行止め



土砂崩れの様子



杜川氾濫の様子

では、どのタイミングで避難所に行けばいいのでしょうか。藤田さんは「避難所が開設されたときは、大変な状況なんだと思ってください。安全に避難所へ移動できる、雨が弱く日が明るいうちに避難所へ来てください。」と言います。避難所には暖房がついているとも限りません。毛布があるとも限りません。私達は水と食料、そして体温調節ができるものを持つていく必要があります。

災害はいつ起きてもおかしくありません。なので災害が起きてから、どういう行動をするか、家族や身近な人達とあらかじめ考えておく必要があります。私はその考えの中に「避難所に行く」という選択肢を持って欲しいと思っています。確かに避難所へ行くことには不安がある方もいるかもしれませんが、場合によっては、自宅待機をした方が安全な場合もあります。しかし、避難所へ行くことで拭える不安や、自分1人の身を守ること以上のメリットもあります。避難して特に被害がなかった後でも、「何も起きなくてよかったね」と笑い合えたらいいと思います。

取材・ライター/ 齋須 いぶき

葉ノ木平震災復興公園について

皆さんは震災の記憶を形として残していく意味はなんだと思いますか？



①かまどベンチ



②防災トイレ



⑤震災の記念碑



⑥記念パネル

白河市の葉ノ木平地区では東日本大震災により大規模な土砂崩れが起こりました。約7万5000m³もの土砂が流れ落ち同地区を襲い、13人の方が亡くなりました。この被害を忘れないようにと白河市によって作られたのが葉ノ木平震災復興記念公園です。ただの公園ではなく、防災公園として様々な工夫がなされています。

① かまどベンチ

通常はベンチとして使用。災害時には、座板を外すことで炊き出し用かまどになります。薪を燃やして、お湯を沸かしたり、鍋料理ができます。

⑤ 震災の記念碑

公園の奥に行くと「震災の記念碑」があります。毎年、3月11日は公園で慰霊祭が行われています。午後2時46分、記念碑の前で住民の皆さんが黙祷をします。記念碑の後ろが、土砂崩れの起こった現場です。現在は立ち入り禁止になっています。震災後に整備された植樹もあります。この場所は、地震発生時には、土砂災害警戒区域（土砂災害の起こる可能性の高い危険箇所）としては、指定されていませんでした。

⑥ 記念パネル

震災の悲惨さを物語る記念パネルもあります。東日本大震災の概要、津波が来た場所、各地の震度などが載っています。白河市内では、葉ノ木平地区で土砂崩れによって13名、大信限戸地区でもやはり土砂崩れによって1名、萱根地区では瓦の落下により1名が命を落としました。よって、白河市内では計15名が亡くなったと記されています。

② 防災トイレ

マンホールの蓋を外し、テントや仮設洋式便座等を組み立て、非常用トイレとして使用することができます。断水等で水洗トイレが使用できなくなった際にも、下水道と直接繋がっているの、流す必要があります。

③ 防災あずまや

屋根付きベンチのあずまや。災害時には、防風のためのテント幕を張ることができ、寒冷期の被災でも、休憩場所として活用できます。

④ 一次避難所

万が一災害が起きた時の一次避難所にも指定されています。一次避難所とは、災害によって住居等が壊れたり、家が使用出来なくなったりしている被災者に対し、宿泊や給食等の救援援助を実施する施設です。



ちなみに二次避難所とは、一次避難所では避難生活を送れない人のために設置される施設です。

公園にすることでトイレに立ち寄った、遊びに来た、などの理由で小さい子どもからお年寄りまで、幅広い年齢層の方が目に止めてくれることとなります。現在、公園に隣接して国道294号白河バイパスの整備が行われています。白河スマートインターチェンジからのアクセスが改善され、より多くの人がこの公園のことを知ってくれることでしょう。パネルや記念碑を見た人が、少しでも震災に興味を持ってくれたら嬉しいのです。

取材・ライター／坂田 実紀



あの日葉ノ木平 で起こったこと

東日本大震災で当時被災地で行方不明の方の捜索活動を行っていた鈴木さんに取材をさせていただきました。場所は、葉ノ木平地区にある葉ノ木平震災復興記念公園です。実はこの公園が造られた場所は東日本大震災で大規模な土砂災害があったところで、死者13名、全壊家屋10戸の甚大な被害を受けました。

当時、津波被害や原発災害と比べて、あまりニュースなどでは取り上げられませんでした。が、津波被害を除き県内最大の人的被害があった場所です。



すみれ 当時、東日本大震災が発生した際、どのような被害がありましたか？

鈴木 土砂崩れが起き、付近に建っていた家屋とともに住人など、合わせて13名の方が巻き込まれました。地面には3〜5mに渡り、土砂が堆積し、どれだけ多くの土砂が崩れたのかが分かります。

すみれ 凄まじい被害ですね…。この時、鈴木さんは市役所の職員としてどのような対応をされたのですか？

鈴木 消防、警察、自衛隊、建設会社の関係者が24時間態勢で土砂に埋まった住人等の捜索に当たり、私は、捜索隊と救出作業を見守るご家族の方々とを繋ぐ役割を務めました。

すみれ 24時間体制ですか！

具体的にどのような捜索活動を行っていましたか？

鈴木 土砂の量が莫大であったためスコップで掘り返す作業は難しく、まずは重機で土砂の表面を少しずつ削り取る作業を行いました。

また、一刻も早く発見できるように、ファイバースコープを準備しました。しかし、堆積した土砂は火山灰質粘性土と呼ばれる地層で、一度水分を吸収すると非常に強い粘り気を持つ土に変わるため、ファイバースコープでの捜索は困難



捜索活動を行った鈴木さん

を極めました。なお、捜索に際しては、発見された後発見された後すぐに病院へ搬送できるように救急隊員を待機させ、捜索者がその時につけていた衣類や持っていた物などを手がかりにしました。それらが発見されると、近くに捜索者がいる可能性が高いので、一旦重機を止め、手作業で掘り進めることを何度も何度も繰り返しました。

すみれ 捜索活動で気をつけていたことはありますか？

鈴木 やはり、捜索活動においては時間が勝負になります。毎朝、捜索する前に本部でその日の捜索方針を入念に打合せし、捜索のポイントを

絞るなど、日々工夫を重ねました。

すみれ 状況を冷静に判断しながら捜索を行ったのです…。捜索はいつ終了したのですか？

鈴木 最初に発見されたのが発生から2日後、そして最後に発見されたのが12日後の3月23日でした。土砂の性質が悪く、捜索が難航してしまっただけで時間がかかってしまいました。

星 トラブルなどはありましたか？

鈴木 うーんと…。救出作業中は規制線っていうのを張って、現場には作業員以外入れないようにするんですよ。ですが、土砂崩れの被害者の関係者が規制線を越えて入ってきてしまうんです。そして、ヒーターで暖をとる作業員を見て、「ちゃんと真剣に作業をしろ」と訴えられることがありました。もちろん関係者の方々の一刻も早く自分の家族を見つけないとの気持ちは十分分かるのですが、こちらも決してサボっているわけではなくて、重機で掘り進めている間は出番がない人もいます。

星 その救出作業の中で、誰かに助けられた、というエピソードはありますか？

鈴木 ああ！ その家の方（すぐ近くに建つ家を指して）が、ヒーターのコンセントと延長コードを貸してくださったんですよ。どれほどかかるか分からない、手探りの救出作業の中、

こういった助けは大きな励みになりました。

星 なんと！ すぐその家の方ですか。災害時の助け合いは大切とは言いますが、実際に行動するのは中々勇気がいりますよね。自分だったらそんな風に行動できたかなあ…。

すみれ 捜索活動が終了し、改めて思ったことはありましたか？

鈴木 葉ノ木平の土砂災害ではファイバースコープ（注：先端にカメラがついた、柔軟性のある管）が使えなかったり、噴き出す地下水の排出に追われるなど想定外なことが多く、その場で臨機応変に対応しなければならぬ場面が多くありました。今何ができるか、何をすべきかを、自ら考え、行動することの重要性を強く感じました。

すみれ 最後に、いつ災害が起きるかわからない



すべり防止区域パネル

い今、わたしたちはなにを心がけていけばよいと考えますか？

鈴木 自分の命は自分で守らなければいけません。例えば、家の中で落ちたら危ないものはないか、身近な避難場所はどこかなど、常日頃から危険分子や周囲の状況を確認しておくことが大切であると思います。そうすることによって、仮に災害が起きた際にも被害を最小限に食い止めることができるはずです。

すみれ 取材をさせていただき、本当にありがとうございました！

鈴木さんへの取材を通して、わたしが特に感じたのは、自ら気づき、行動することの重要性です。災害への備えというと、非常用持ち出し袋などの物資を想像しがちです。しかし、わたしは心構えも立派な災害への備えになると思います。今わたしは何ができるか。少しでも普段の生活から意識してもらえたらうれしいです。

取材・ライター／ 駒坂すみれ、星 颯斗

いろいろな立場の方へ取材を行ってきた中で、特に印象に残っている方がいます。それは、当時業ノ木平で捜索活動を行っていた鈴木さんです。取材の

「防災ライター」として、東日本大震災がもたらした被害、それをどのような方法で復旧させたのか、そしてこれから起きるかもしれない災害に対して私たちはどのような「防災」をしていくべきなのか取材を通して考えました。実際に、耳で聞き、目で見、肌で感じるという経験は私にとっては貴重なものでした。以前の私は、防災に対して「防災グッズを持っていれば大丈夫」という考えを持っていました。しかし、取材で話してくださった当時の状況などの話を聞いて、なんて浅はかで危ない考えだったのだろうと強く思いました。

防災を語り続ける



駒坂 すみれ
Sumire Komasa

01

防災ライターを経験して

中で「嫌な思い出だけで終わらせない。」という言葉聞いたとき、これも防災の1つだと感じました。起きてしまった事実から目を背けず、経験をしていない人へ語り継ぐ。「物質的なものの防災だけでなく、当時の気持ちや教訓を伝えることも防災に繋がるんだな。」と気づかされました。そして、鈴木さんへの取材を記事へ書く時、どうしたら鈴木さんの思いが読んでいる人に届くかを常に考えていました。こんなにも、気持ちや事実を発信することは難しいのかと発信する側に立ったからこそ分かったことがたくさんありました。

未災者から未災者へ

自分の書いた記事が載ったパンフレットを「災害メモリアルアクションKOBÉ」というイベントで同じ年代の高校生や大学生に配りました。午前中は、参加したチームの活動発表があり、発表を聞いていた中で「未災者から未災者へ」というキーワードが頭に残りました。発表していたチームは、中・高校生や大学の研究室の方ばかりで、実際に震災を経験していた世代であるにも関わらず、率先して防災について考え、発表している姿に尊敬と「私ももっと防災について知ってもらいたい。」と強い使命感を抱きました。また、活動発表で感じたことは、地域や人との連携の重要さです。1つのチームでは、地域の人と一緒に避難所開設ゲーム(HUG)を行っ



一緒に神戸に行った3人

ていました。地域全体で情報を共有し、課題を解決していくことは防災では必要不可欠だと感じました。防災ライターをやることと決めた時、内容も難しく、記事を書くなど今までやったことのないことばかりで、緊張と不安もありませんでした。しかし、今ではやってよかったなと心から思います。知らないからこそ、1歩踏み込んで知ろうと努力することが大切だと学びました。全ての活動を通して、改めて、防災の重要さを確認すると共に、自分から進んで動いてみることを知ることができました。



神戸訪問レポート

～伝える大震災、つなげる防災～

神戸では阪神・淡路大震災から25年。2016年から行われている災害メモリアルアクションKOBÉに参加してきました！世代を超え、少しでも被害を小さくするために未災者である中・高校生も主体となり、防災・減災について考えます。

9:00 栄食堂

美味しい朝ごはんとお店の方の行ってらっしゃいにお腹も心も満タン！1日がばりましょう！

9:30 人と防災未来センター

大阪湾に隣接する防災・減災に貢献するために作られた機関。ここが発表会場！

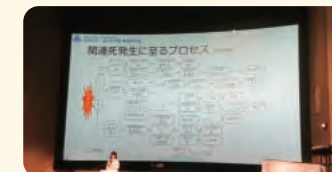


10:00 活動発表

関西圏の大学生・高専生・高校生の発表を聞きました。関西大学社会安全学部奥村研究室の発表。災害関連死についての発表でした。避難所生活での悪環境による関連死において、実際に死因となる疾患ほどあまり認知されていないことが意外でした。

12:00 パネルディスカッション

人と防災未来センターと関西大学の研究者をコーディネーターに、神戸市立渚中学校・滋賀県立彦根東高校の生徒さんがディスカッション。「今、私が伝えたいこと」がテーマ！活動の原動力は？戸惑いはあった？発表した活動の裏側にフォーカス！



13:00 ポスター発表



本番！限られた時間の中でポスターを用いながら発表！裏庭編集部のこと、自分たちが行った活動、伝えたい思いを神戸の方にしっかりと伝えることができました。



14:00 コンサート

同じ福島県の「福島しあわせ運べるように合唱団」さんによるコンサート。力強く、綺麗なハーモニーが会場に響き渡りました！



15:00 ランチ

オシャレなパン屋さんでランチ。美味しいパンを食べながら、ひとまず休憩！

16:00 NPO 法人 プラス・アーツでの意見交換会

永田 宏和さんに、デザインを用いた防災教育について伺いました！親しみやすいイラストと思わずやってみたくなるイベントで防災を身近に感じやすかったです！



17:00 伊丹空港からANAで福島へ

神戸から福島へ！空から見える大阪の夜景に一同うっとり…



20:30 ただいま！

神福島空港に到着！みなさんおつかれさまでした！ゆっくり休んでね！



坂田 実紀
Miki Sakata

02

関連死と避難訓練

初めて神戸に向き、私は多くの気づきがありました。今回の神戸のイベントでは、学生の皆さんが学校や地域で行っている活動を発表しました。大震災を想定した避難訓練や、防災について学べるゲームの開発や、各団体が様々な活動報告をしていました。印象に残った発表は、大震災における関連死について研究したものでした。震災が発生し、ライフラインが停止すると、普段通りの生活を送ることが困難になります。例えば、避難場所が不足し、車中泊をします。

すると、長時間同じ体勢になり、血栓ができ、エコノミークラス症候群に陥る事になります。東日本大震災でも、関連死で亡くなった方がいました。大震災を連う目線で見ることができ、とても新鮮でした。

次に、地域の方も交えた避難訓練です。学校の中だけではなく、地域の方も巻き込んでやる避難訓練は聞いたことがなかったので聞いて、ぜひ実践したいと思いました。まず、学校内で防災ジュニアリ

ダーを決め、地域の代表の方とHUGを行います。HUGとは、避難所運営ゲームという事です。次に、4つの班に分かれ本番までにそれぞれに役割を確めるなど、緻密な準備を行います。

・情報班（物資の数、避難者の確認をし、人手不足を減らす）

・開設班（避難所の場所作り、誰をどここの避難所に入れるかを決める）

・物資班（物資の手間取り、福祉センターや公民館などから不足した物資を運び出す）

・誘導班（様々な人を避難所へ誘導する）

それぞれが役割を果たし、円滑な避難所経営を行うことが出来ます。そして、当日になりました。事前の準備もあつてか、成功はしたものの多少ごたついた所もあったそうです。例えば、しょうがい者や車椅子の方、けが人をどこの避難所へ誘導するか戸惑ったり、情報が上手く伝わらず、場を混乱させてしまった大変だったと言っていました。本番まで大変な作業とはなると思いますがとてもいいと思いました。地域の方と連携して、防災について考える機会などないと思うので、とてもいい機会だと思いました。

被災者責任は伝えること

貴重なお話を沢山聞かせて頂けて、改めて防災について考えるきっかけになりました。発表していた

学生の皆さんは阪神・淡路大震災を経験していない「未災者」です。しかし、この経験を生かし防災について様々な活動を行っています。25年経った今でも、大震災を決して風化させず学んだ教訓を受け継いで、伝えていって事にとても感動しました。

私には、東日本大震災を経験した1人として、「被災者責任」があると思っています。だからこそ、震災を経験していない人々へ伝えていき、また大震災が起きた時に、大きな被害が出ないようにと、繋げていくことが大切だと思っています。

パンフレットの太字に「伝える大震災、つながる防災」と記載してありました。私は、未災者と被災者を繋げられるような人になりたいです。そして、互いに防災について考え、学び、二度と同じような惨劇を繰り返さないために。

災害メモリアルアクションKOBでパネルを閲覧



星 颯斗
Hayato Hoshi

03

体験していない人に伝える

災害メモリアルアクションKOBで1番衝撃を受けた一文が、「震災を体験していない人が、震災を体験していない人に伝える仕組み」です。確かによく考えれば、被災者の方々が何十年も、何百年も生きてることなんてありなくて、どんな被害が生まれるか、どんな物が役に立つのかなどをずっと被災者の口から直接聞けるわけではないので、当然のことでした。しかし、当たり前のこと過ぎたので

でしょうか、今までは自分の頭の中には全然そのような考えがなくて、あるのは「震災を経験した自分が経験していない人に伝えないと」という変に立派な使命感だけでした。そのため、冒頭から、眼から鱗が落ちるような話でした。また、実際にアンケートを採っている団体や、自分達で防災を学ぶための新しいゲームを開発している団体などがあり、とても新鮮で、勉強になりました。雑談の中で、阪神・淡路大震災を経験した方が仰った、「かいじゅうが暴れ

たようだった。信号機はぶら下がってるし、なんか粉っぽい」という話。自分が経験した東日本大震災では全くそんなことはありませんでした。そのことから、災害メモリアルアクションKOBに参加する前に青砥さんが仰っていた、「東日本大震災のときは津波や、二次的な被害として放射線とかはありました。建物は思ったほど壊れてなかったはず。それは、阪神・淡路大震災が起こったことから、建築基準法すら変わったんですよ。建物が簡単には壊れないように。だから、東日本大震災のときは、それほど建物が壊れた被害は多くはなかったはずです」という話に、実感が湧きました。

伝え方を工夫する大切さ

KIITO（NPO法人プラスアーツが入居する施設）で永田さんにお話して頂いた話で大切だと思っことは、「楽しければ子供からやりたいと言ってくれる、何度もやってくれる」、「伝えるとき大切なのは伝え方」、そして「人をつくる」の3つです。楽しいって大事だと、個人的には思っていました。つまらないことを堅苦しくやるより、楽しくやったほうが身に付きやすくなると思います。それは、間違って無かったんだと確信を持つことが出来ました。ですが、永田さんが始めたときはバッシングが色んなところから来たとのことでした。それでも曲げずに続けた強さ、自分も真似出来るよう、がんば

ります。「伝えるときに大切なのは伝え方」については、後に具体的に仰っていました。「双方向」であることと、「余白」があることだそうです。確かに一方的だと覚えづらいですし、楽しくありません。余白は、考える余地を残すということらしいです。やはり学部側が能動的でないとダメなんだな、と納得しました。そして、「人をつくる」。これは、最初の防災イベントでは自分らが伝えるけど、2回目からは伝えられた人達で伝えていってください、ということ。この内容は、最初に災害メモリアルアクションKOBで衝撃を受けた一文、「震災を体験していない人が、震災を体験していない人に伝える仕組み」のひとつの答えだと、聞いた瞬間に頭の中でピースがパチっとはまったようでした。

最初に気になることが生まれ、そのヒントをKIITOで頂ける、しかし最終的な答えは自分で見つけなければならないという、とても有意義な（そして、美味しいものもたくさん食べることが出来る）とても楽しかった活動でした。忙しい中準備やサポートをしてくださった青砥さんや藤田さんやその他の方々、出資してくださった方々、ありがとうございます。そして、自分の子のいい経験になるだろうと、快く旅に行かせてくれた両親にも、しっかりと感謝を伝えたいと思います。この度は、ありがとうございました。



柳沼 諒
Ryo Yaginuma

04

福島について発信し続けたい

良い勉強になった。取材をすること、記事を書くことの難しさがわかった。今回の体験をこれらに活かしていきたい。取材に行った二つの場所を、私はどちらも知らなかった。今回の取材で初めて知った。ましてや、汚染土がどう処理されているか、どんな防災用具が公園にあるかなど、知る由も無かった。私の住んでいる町なのに。自分では地元について何も知らなかったんだな、と思った。もう少し地元について勉強しておこうと思った。

取材先の人達は優しくかった。辛くて悲しい記憶でもあるはずなのに、快く話してくれた。私なら話せるだろうか。土砂から人を探したとか、どんな人が死んだとか、伝えることが出来るだろうか。恐らく出来ない。嫌な記憶だから、早く忘れたいと思ってしまうだろう。

私も東日本大震災を経験した。小学二年生、



斎須 いぶき
Ibuki Saisu

05

防災意識を共有する

今回防災ライターという企画に参加し、防災の大切さ、そして1人ひとりの防災に対する心構えの大切さを改めて感じました。今回のように

8歳の時だった。何が起きたかわからなくて、怖かった。隣の女子が泣いていた。私も泣いた。自然災害に何もかもぶち壊されて、自分の無力さを痛感した。最悪な気分だった。今もまだ、震災による被害は終わっていない。特に風評被害が酷いように思う。インターネットで少し調べれば、いくらかでも福島県の悪口が出てくる。真実とデマ、どちらも多く拡散されている。福島県の子供は70%が奇形児だという記事も見た。ふざけるなよ、と思った。これからも、福島県について発信する機会があれば参加して行きたいと思う。真実の情報をより多くの人に届け、風評被害を無くしたい。今回の取材で、よりその気持ちが強まった。

直接人にインタビューをして、プロの力を借りながら記事を作るということは、私にとって今回が初めてでした。なので、とても緊張しながら原稿を書かせていただきました。推敲するたびに自分の伝えたいことがだんだん明確になっていきました。そして私はその活動でその感覚がとても好きになりました。また、普段はじっくりお話を聞けることができないような方に、防災のことについて時間をかけて伺うことができたので私自身にとっても、いい勉強になりました。

東日本大震災から9年、阪神淡路大震災から25年が経過しました。私たちは、被災者の後悔や経験を聴き、このような悲劇を繰り返さないようにする努力ができます。そして周りとの防災意識を共有することで予防策はより信頼のできるものになります。災害という、いつ起こるか分からない、不確定要素の多い事柄においてこれほどとても大事なことで私は思います。これを読んでくれた皆さんが少しでも防災意識を高めることができれば、とても嬉しいです。

最後に、今回協力してくださった方々、そして、このような素晴らしい企画を支えてくださった方々に感謝を申し上げます。この活動に参加できて、本当に良かったです。

編集後記



この活動は、コミュニティ・カフェ EMANONで活動する「裏庭編集部」防災ライター部門のメンバーの取り組みです。きっかけは、滋賀県立彦根東高校新聞部顧問の藤村先生から、「活動の様子を神戸で発表しませんか？」とお声かけいただいたことでした。白河市内での取材活動を経て、取材内容を神戸・郡山・白河の3箇所で開催しました。

印象的な言葉があります。取材成果を発表した災害メモリアルアクション KOBÉ 2020 パネルディスカッションでのことです。阪神・淡路大震災から25年、東日本大震災から8年が経過したタイミングでのイベント。登壇する大学生や高校生は、90年代後半〜00年代生まれ。ほとんどの人が「未災者」、つまり直接被災経験のない者として防災や復興に関する活動に取り組んでいます。コーディネーターの高原研究員が、「なぜ活動を続けるのか？」と高校生に問います。そこで彦根東高校新聞部員の方はこう答えます。「私たちが続けている理由：福島県内で、数年前に行ったところにもう一度行くと、街の様子が変わっている。地域の変化が、長く続いていることで伝わりやすい。そして、ずっと続いているね新聞部は、という声をいただく。続いているという事実で、関心を持つてくれる人がいるからです。」「取材をす

る理由としては忘れないため、とかあるけど、続けていることは、その理由に対して説得力を持たせる意味があると思う。」はじめから続けることが目的なのではない、続ける中で、目的が見えてくることのあるのだと、確信しているようでした。なにかの行動をはじめるとき、どのような未来が訪れるのか、予めすべてを見通すことはできません。高校生は、自分が「やってみたい」と思ったその瞬間に、自分で自分の行動の理由を説明できないかもしれません。しかし、続けることで、わかること、伝わることもある。

震災から9年が経とうとしています。参加者の胸の中に「自分が活動をやってみたいと感じた理由」が、ひとつでも残るといいなと思っています。取材に協力していただいた白河市役所のみなさま、災害メモリアルアクション KOBÉ関係者のみなさま、NPO法人プラス・アーツの永田理事長、ご理解いただいた保護者・教職員のみなさまに、この場で深く御礼申し上げます。

発行人 一般社団法人 未来の準備室 理事長

青砥 和希



旗宿 関の森公園で



9784909127044



1920425000005

ISBN 978-4-909127-04-4

C0425 ¥0000E (編集済み)

記事連載中!



大河

白河は防災だけじゃない!? 裏庭編集部 では、白河市が発行する「広報しらかわ」にて、「白河 きょうのあんこ」を連載しています。白河のおみやげにも大活躍するスイーツたちを、ウェブサイトで見てください。



Urianiwa.jp
@Urianiwa_fks



裏庭編集部とは?

コミュニティ・カフェ EMANON を拠点に活動する福島白河の情報を取材・発信するローカルメディア。現役高校生から大学生が所属。滋賀県立彦根東高校新聞部との交流をきっかけに2015年発足。名前の由来は、社会学の用語 Not In My Backyard (NIMBY) から。裏庭にあって欲しいものも、なくて欲しいものも、正面から向き合って伝えよう!との想いを込めて。

白河の防災と復興を 高校生が伝える!パンフレット

[発行日] 2020年1月20日
[印刷] グラフィック
[発行人] 青砥和希
[デザイン] aruca 星かおり
[発行] 裏庭編集部
福島県白河市本町9
(コミュニティ・カフェ EMANON 内)
0248-57-4067
magazine@uraniwa.jp

—令和元年度 チャレンジ!子どもがふみだす体験活動応援事業—